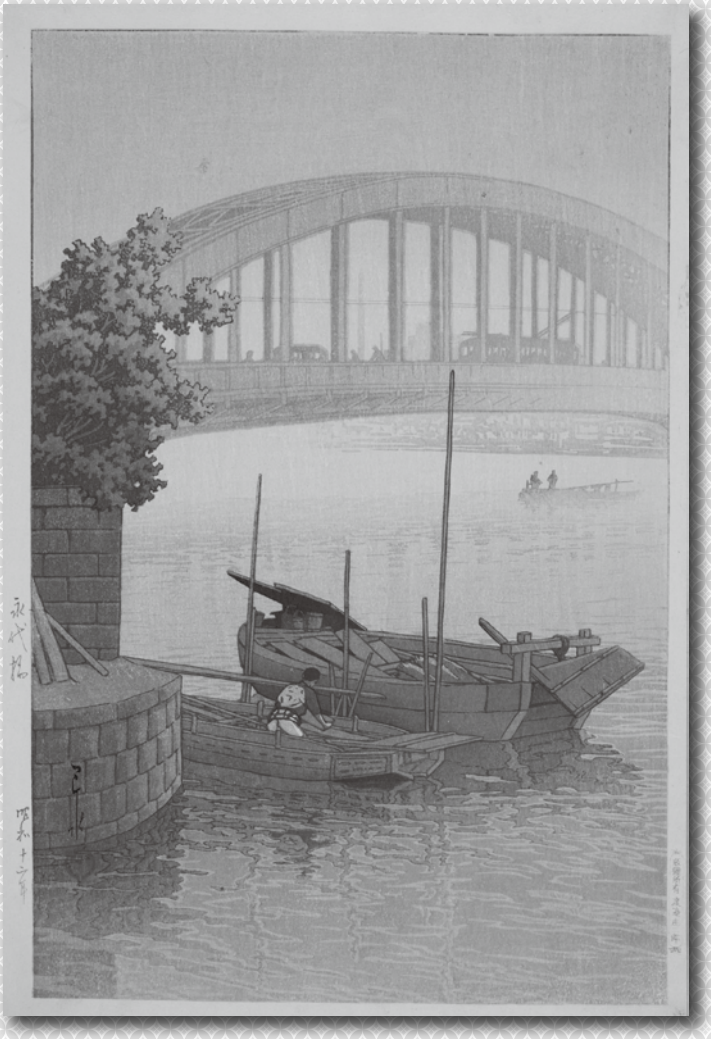
下町文化

NO. 267
2014.9.26

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

歴史と文化を考えよう

平成26年度　文化財保護強調月間



川瀬巴水「永代橋」昭和12年

○歴史と文化を考えよう
平成26年度　文化財保護強調月間
○民俗芸能大会
文化財講演会
東京9区文化財古民家めぐり
○江東区伝統工芸展
○江東区と海
江戸前と澪筋
○中川船番所資料館企画展
砂町の漁業
～海苔養殖と砂町の近代～
○江東の古道をゆく④
十方庵敬順が歩いた元八幡への道(1)
○文化財まめ知識②
江東区内の狛犬

文化財保護強調月間

暑い夏も終わり、いよいよ秋本番を迎えます。秋といえば、食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋など、さまざまな言い方がありますが、もう一つ忘れてはいけないのが「文化の秋」です。秋の夜長、読書やもの思いに耽（ふけ）るのもひとつの過ごし方ですが、地元に目を転じて、江東区の歴史や文化への知識欲を満たすのも一興かと思います。江東区教育委員会は、「歴史と文化を考えよう」と銘打って、10～11月にかけていくつかの事業を実施いたします。

仕事・暮し・祭礼から生まれ、長きにわたって受け継がれてきた技を披露（ひろう）する「江東区民俗芸能大会」、多くの職人さんが実演を公開する「伝統工芸展」、江東区の歴史・民俗などについてお話する「文化財講演会」、区内で唯一の江戸時代の古民家（こみんか）「旧大石家住宅」が舞台となる「東京9区　文化財古民家めぐり」で、深川江戸資料館・芭蕉記念館・中川船番所資料館でも特別展や企画展が開催されます。

詳しくは、2・3ページをご覧ください。お待ちしております。

民俗芸能大会

10月19日（日）
会場　都立木場公園

【午前11時～12時30分】
場所　木場公園内入口広場

木場の角乗　東京木場角乗保存会

江戸時代、木場の筏師（川並）は、鳶口一つで材木を筏に組んでいました。角乗は、その仕事の余技として生まれました。

【午後1時～3時50分】
場所　木場公園内ふれあい広場

木場の木遣　木場木遣保存会

木場の川並衆が材木を操る時、お互いの息を合わせるため、詠われた労働歌です。

木場の木遣念仏　木場木遣保存会

木場に伝えられたもので、大数珠を手繰りながら念仏を唱える大変珍しいものです。

砂村囃子　砂村囃子睦会

江戸時代中期に金町の香取明神社（現葛飾区葛西神社）の神官が百姓に教えた祭囃子の流れを汲むお囃子です。

富岡八幡の手古舞　富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の祭礼で神輿の先頭に立ち、木遣を歌いながら、男髷に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は、辰巳芸者が行いました。

深川の力持　深川力持睦会

江戸時代から倉庫地帯であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化しました。

文化財講演会

「ウォーターフロントから江戸を読む
―近世考古学からみた
都市江戸の形成史―」

江東区のほとんどの土地は江戸時代以降に造成され、現在も臨海部において埋め立てが進んでいます。特徴的といえる江東地域の土地形成史を、考古学の見地から石神裕之氏（京都造形芸術大学専任講師）にお話していただきます。

日　時　11月12日（水）
午後6時30分～8時30分

会　場　深川江戸資料館2階小劇場
（江東区白河1-3-28）

定　員　200人（先着順）
※入場無料

東京9区文化財古民家めぐり

期　間　10月1日（水）～11月30日（日）

都内9区が参加して、各区の文化財古民家を紹介します。東京区政会館（千代田区飯田橋3-5-1）では、10月3日（金）～30日（木）に「来て見て発見！はじめよう文化財古民家めぐり」と題した展示を行います。江東区にも旧大石家住宅（南砂5-24地先）がありますので、この機会にぜひお立ち寄りください。ご興味のある方は、他区も訪ねてみてはいかがですか？

会場
●都立木場公園（木場4丁目）入口広場・ふれあい広場

交通
●東京メトロ東西線「木場駅」下車徒歩5分
●都営地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・都営地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分
●都営バス 業10〔とうきょうスカイツリー駅前～新橋〕木場4丁目下車

無形文化財公開事業

江東区伝統工芸展

入場無料

日時　10月31日(金)～11月3日(月・祝)　午前9時30分～午後5時
※最終日は午後4時まで

会場　深川江戸資料館　地階レクホール(江東区白河1-3-28)

本展では、伝統工芸の技を受け継ぐ区無形文化財保持者による実演を行います(左日程表参照)。受け継がれてきた伝統の技をご覧ください。また体験が可能なものもあります。

伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。またとない機会ですので、是非どうぞ。

技の体験(実費がかかります)

午前10時～正午
午後1時～3時
左日程表のうち、　の技術で体験ができます。申込は会場で直接職人さんに申し出てください。

実演公開日程表

	技術「体験内容」	保持者
10/31(金)	べっ甲細工	磯貝　實
	刀剣研磨	臼木良彦
	すだれ製作 「すだれを編んでみよう」 色紙掛けができます 費用 500 円	豊田　勇
	表具 「一閑張の器をつくろう」 費用 800 円	岩崎　晃
	建具	友國三郎
	紋章上絵	石合信也
11/1(土)	襖帽・襖椽	鈴木延坦
	染色補正	丸田常廣
	無地染 「ストールを染めてみよう」 正絹（90㎝× 35㎝） 費用 2,500 円	近藤良治
	表具　※内容は 10/31 と同じ	岩崎　晃
	手描友禅	和田宣明
	更紗染 「刷り染めで東海道五十三次を染めてみよう」 費用 2,500 円 ※図柄未定	佐野利夫
	更紗染	佐野勇二
	江戸指物 「筆箱をつくろう」費用 1,500 円	山田一彦
	庖丁製作	吉澤　操
11/2(日)	木彫刻　「文字を彫ろう」 ①桐の文箱 費用 2,500 円 ②姫小松の板費用 1,500 円	岸本忠雄
	刀剣研磨	臼木良彦
	すだれ製作　※内容は 10/31 と同じ	豊田　勇
	相撲呼出し裁着袴製作	富永　皓
	手描友禅	和田宣明
	更紗染　※内容は 11/1 と同じ	佐野利夫
	更紗染	佐野勇二
	江戸指物　※内容は 11/1 と同じ	山田一彦
	江戸切子 「カットをしてみよう」 直径約 16㎝の皿 費用 1,000 円	小林淑郎
11/3(月・祝)	帯製作	杉浦正雄
	刀剣研磨	臼木良彦
	すだれ製作　※内容は 10/31 と同じ	豊田　勇
	紋章上絵	亀山晴男
	建具	友國三郎
	更紗染　※内容は 11/1 と同じ	佐野利夫
	更紗染	佐野勇二
	江戸指物　※内容は 11/1 と同じ	山田一彦

（順不同・敬称略）

※都合により変更する場合もあります。ご了承ください。
　　の技術は体験ができます。申込みは当日会場で。

深川江戸資料館 ー案内図ー

会場・深川江戸資料館への交通

●東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄大江戸線
「清澄白河」駅下車　A3出口　徒歩3分
●都営バス門33系統「清澄庭園前」下車　徒歩3分
●都営バス秋26系統「清澄白河駅」下車　徒歩4分

江東区と海

「江戸前」と澪筋（みおすじ）

「江戸前」という言葉には、どこか惹（ひ）かれるものがあります。身近なところでは江戸前寿司がありますが、あらためて考えると「江戸前ってどんな海？」「範囲は？」など、実は知らないことが多いことに気付きます。ビルが林立する現在とは、まったく違った江戸前の「世界」をお話いたしましょう。

1、江戸前とは？

「江戸前」を『日本国語大辞典』で引くと、「江戸湾（東京湾）近海をいう」や「江戸の前」のことで、「前」は漁場の意味でもあると書かれています。江戸の前海を指し、現在の東京湾近海でもあるという点で、とくに範囲を限定した内容ではありません。

また、江戸近海で獲れた新鮮な魚を指す言葉でもあったようで、江戸前に広がった、豊かな海を自慢する「江戸っ子」の気持ちが込められた言葉のようにも思われます。そのことを示すように、江戸時代や明治初期の錦絵（にしきえ）では、多勢の人が潮干狩（しおひがり）をしている様子が描かれ、『江戸名所図会』の挿絵「品川汐干」には、貝拾いや蟹（かに）・魚と戯（たわむ）れる様子が描かれています。それほど、多種多様な魚介類（ぎょかいるい）が生息し、あるいは回遊（かいゆう）する海だったのです。

広重画「東都三十六景　洲さき汐干狩」（国立国会図書館所蔵）

範囲を記したものには、江戸時代後期の史料があります。文政２年（１８１９）に日本橋の肴問屋（さかなどんや）（関東大震災後しばらくして現在の築地（つきじ）に移転）が幕府の問い合わせに対し、提出した返答書ですが、そこには、「江戸前ト唱ヘ候場所ハ、西ノ方武州品川洲崎一番ノ棒杭（ぼうぐい）ト申場所（中略）東ノ方武州深川洲崎松棒杭ト申場所」（『日本橋魚市場沿革紀要』）と記され、品川の目黒川河口部（東品川1付近）の沖合にあった一番棒杭から深川の洲崎（木場6付近）の沖合にあった松の棒杭を見通した内側というものでした。

幕府がなぜ江戸前の範囲を肴問屋に問い合わせたのかは不明ですが、その範囲に対する明確な認識を持ち合せていなかったことだけは確かでしょう。

2、砂州の形成

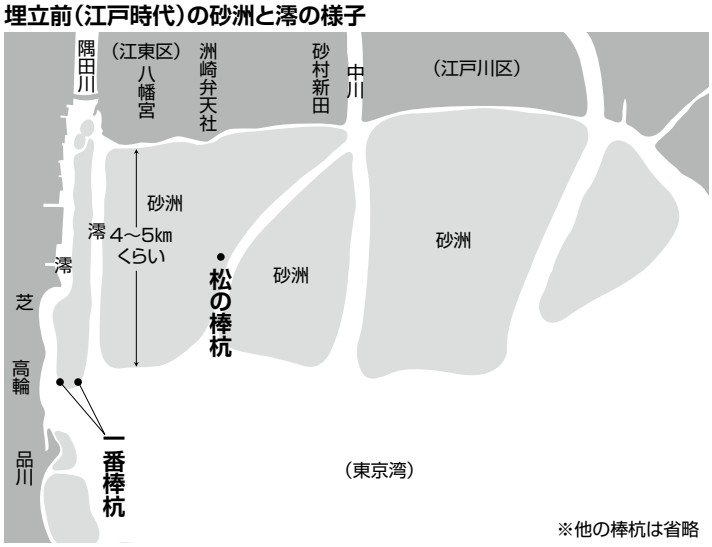
人々が獲れた魚も含め、「江戸前」と呼んだ海は、一面に砂地が広がる遠浅の海でした。多摩川、隅田川、中川、江戸川をはじめとする大小河川が流れ込み、運び込まれた大量の砂は、長い時間をかけて江戸内海（東京湾内湾）に砂洲（すす）を形成しました。とりわけ湾北部の深川沖には、推定4～5kmにもわたる遠浅を形成しました。

20年ほど前、明治37年生まれの深川の猟師さんに、汐が引いたとき砂洲のなかの少し深いところに網を仕掛け、満ちるのをまって黒鯛を捕獲したと聞いたことがあります。今では知る人もいないでしょうが、これも砂洲を利用した江戸前漁法のひとつといえます。

3、澪筋とは

江戸前の砂洲は豊富な魚介類を育む一方、江戸に出入りする船にとってはやっかいな存在でした。砂洲への乗り上げを防ぐため、澪筋と呼ばれる船路を通らなければなりません。澪とは、江戸の前海に流れ込む河川の水流が形作った海底の「溝」です。現在でも航路になっていますが、満潮時には位置がわからなくなるため、当時は目印として「棒杭」が建てられました。

埋立前（江戸時代）の砂洲と澪の様子



※他の棒杭は省略

「品川大森羽田海苔場処絵図」（大田区立郷土博物館所蔵）をもとに作成

『慶長見聞集』の「江戸河口（かこう）野地ほんぎの事」には、江戸瀬戸物町の野地豊前なる人物が天正19年（１５９１）に「みをしるし」を建て、俗に「ほんぎ」と呼ばれたと記されています。のちの棒杭と考えられますが、先述のように、番号や素材の松などが名称に付されたものなど、澪標（みおつくし）として何本もの棒杭が建てられ、江戸前の海での船の安全を支えていました。その砂洲も、現在ではほとんどが埋め立てられ、景観もすっかり変わってしまいました。

次号は、漁場としての江戸前を考えます。（文化財主任専門員　出口宏幸）

平成26年度　中川船番所資料館企画展

「砂町の漁業 ～海苔養殖と砂町の近代～」

海に面していた江東区南部の砂町（現在の北砂・南砂・東砂・新砂）では、明治期から昭和37年（1962）に漁業権が全面放棄されるまで、海苔（のり）養殖を中心とする漁業が行われていました。また、江戸・東京の近郊農村だった砂村に近代産業の工場が進出し、大正10年（1921）に「砂村」が「砂町」になったように、地域が大きく移り変わっていった時代とも重なります。そこで、7月23日～8月31日に中川船番所資料館で開催した平成26年度企画展では、近代の砂町で行われていた海苔養殖を取り上げました。

海苔の養殖風景（株式会社山本海苔店所蔵）

江戸時代までは、深川猟師町（現在の江東区清澄・佐賀・門前仲町・富岡の一部）など「御菜浦（ぎょさいうら）」と呼ばれる地域が、幕府に漁獲物を献上するかわりに、江戸湾内で自由に漁を行う特権を与えられていました。一方、砂村新田（現在の江東区南砂と東砂8丁目一帯）のように海に面した村でも漁業が副業として行われていましたが、これらの村は「磯付村」と呼ばれ、半農半漁の村として扱われました。

砂町で海苔養殖を中心とする漁業が行われるようになったのは、明治19年（1886）のことです。江戸時代の海苔養殖は羽田（大田区）や大森（大田区）を中心に行われてきましたが、明治期になると漁業の主体は村から組合へと移り変わり、明治33年には漁業法（旧漁業法）が制定されました。江東区域の深川浦と砂村（城東）でも漁業組合が結成され、江東区域南部の間之洲（あいのす）（間能洲）と呼ばれる遠浅の海のうち、10万坪が海苔採場（養殖場）として選ばれました。

上の写真は昭和30年代の海苔養殖場を撮影したものです。海苔ヒビが海の上に広がり、その間をべか船が行き来しています。なお、昭和36年10月当時の状況を見ると、深川浦の組合員は漁業のみを生業としているのに対し、城東（砂町）の組合員は農業と漁業（主に海苔養殖）の両方を行っており、深川・砂町のそれぞれの地域性をよく表しています。

明治後期～昭和30年代の砂町の特徴は、北部の小名木川沿いが工場地帯になり、南部で海苔養殖が行われていた点にあります。小名木川は物資輸送の中心であり、大正8年に東京運河土地株式会社が近隣の要望により設立され、砂町を南北に貫通する運河（砂町運河、現在の仙台堀川公園）が開削されました。また、昭和4年には小名木川沿いに水陸両用の国鉄貨物駅である小名木川駅（現在のアリオ北砂付近）が開業しました。

都電線路脇の海苔干し（昭和30年頃）

左の写真は南砂2丁目の都電（38系統）の線路脇で、女性が海苔を干しているようすを撮影したものです。線路沿いは日当たりが良いため、当時はこのような風景がよく見られました。

しかし、昭和30年代に入ると、東京湾の埋め立てや水質汚染などによって海苔養殖は衰退し、昭和37年12月に東京都内湾の漁業権が全面放棄されたことで、砂町の漁業も終わりを迎えました。右の写真は漁業権が放棄される直前の昭和35年2月に撮影されたものです。東京の前海で埋め立てが進み、海上に黒い線で写る海苔の養殖場が、沖合へと広がっているようすがわかります。

海苔漁場俯瞰図
（『東京都内湾漁業興亡史』より転載）

埋め立てが進められ、農地がなくなり、住宅地になった現在では、砂町で漁業が行われていたことを示す手がかりは残されていませんが、平成8年（1996）に仙台堀川公園の中に移築された旧大石家住宅は、江戸時代に建てられた区内最古の民家で、かつては東砂8丁目で農業と海苔養殖を兼業していました。現在は毎週土・日曜日と休日に一般公開しています。

旧大石家住宅

（中川船番所資料館　鈴木将典）

江東の古道をゆく④
十方庵敬順が歩いた元八幡への道（二）

今回は、江戸時代の散歩好きが歩いた道をたどり、洲崎神社（木場6-13）から元八幡（富賀岡八幡宮、南砂7-14）へ向かう古道をたずねます。

散歩好きの名は敬順といい、小石川（文京区）の本法寺十方庵の庵主で、文化8年（1811）51才の時に隠居してからは、江戸近郊各地をたずね歩くことを楽しみにした人です。そして散策で見聞したことを『遊歴雑記』としてまとめており、当時の景観や雰囲気を今に伝えてくれています。

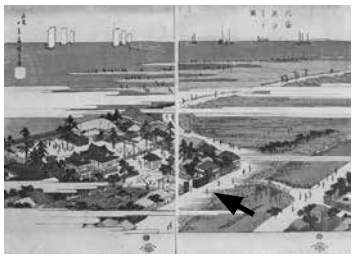
『遊歴雑記』によると、敬順は二度元八幡に訪れています。一度目の時期は分かりませんが、二度目は文化13年閏8月21日でした。

敬順は、一度目の散策で、洲崎神社から元八幡へ向かう道のりを次のように記しています。

弁天より川にそひて東へゆく事凡弐拾余町（約2.4km）、爰に三ツ目の板橋を左りへ越て、又川にそひ東へゆく事数拾町にして、堀留より右へまがりて

左頁の「本所深川絵図」で道筋を追っていくと矢印のように推定されます。この道は現在どのようになっているのでしょうか。

洲崎神社から富士見橋跡まで


洲崎弁才天境内全図（部分）

敬順は、洲崎の雄大な景色を楽しみながら堤を歩き、弁天（洲崎神社）北側の道から川に沿って歩いていったと考えられます。川は現在大横川の一部ですが、江戸時代には十間川と呼ばれていました。右の「洲崎弁才天境内全図」（部分）には、十間川に沿う弁天北側の道（矢印）がはっきりと描かれています。現在は河川改修のため道筋が川岸から離れ、川と道の間には建物が建ち並び、景色は一変しています（写真①）。

①

道を進んでいくと東陽1丁目との間に流れる大横川南支川に架かる弁天橋に行き当たります（写真②）。東陽1丁目の地は明治20年（1887）に埋立地が深川区に編入されて成立し、弁天橋もこの頃に架けられました。現在の橋は昭和7年（1932）に竣工した関東大震災後の復興橋梁です。ですから敬順の時代に弁天橋はありませんでした。

②

弁天橋を渡ると道は左へ大きくカーブして永代通りに出ます（写真③）。江戸時代以来の道は川（二十間川）に沿って続いていましたが（矢印）、震災復興後に永代通りを境にして東側にずらして造られました。写真③の右手に見えるビルの左脇を通る道です。

③

永代通りを渡って復興道路を進んでいくと十間川との合流地点であった交差点にいたります（写真④）。左ななめの道には、十間川を渡る富士見橋が架かっていました。橋名は江戸時代以来で、橋は明治6年に架け替えられ、さらに昭和4年に復興橋梁が架けられましたが、平成25年に撤去されました。跡地には橋の一部を利用したベンチが置かれています。

④

富士見橋跡から豊砂橋あたりまで

敬順は富士見橋を渡らずに、右手の十間川沿いの道を歩いていきましたので、写真④の右手の道に入ります。道筋は江戸時代とほぼ変わりありません。現在の横十間川親水公園沿いに歩き、途中大門通りや四ツ目通りを越え、左手に大きく曲がって葛西橋通りへと向かいます（写真⑤）。

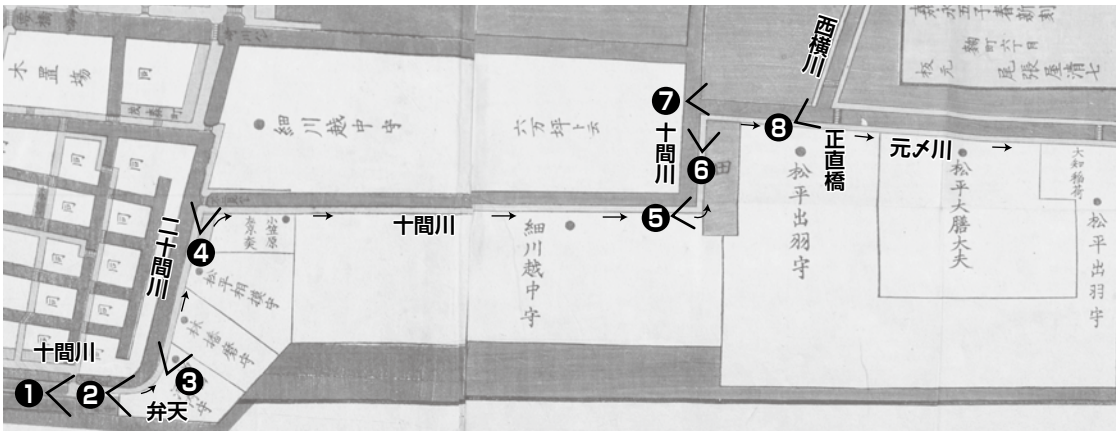
⑤

道は少し上って葛西橋通りと接続します（写真⑥）。突き当たり左は豊砂橋です。葛西橋通りは震災復興で造られ、豊砂橋は昭和5年に竣工しています。この地を訪れた永井荷風は次のように書き残しています（昭和9年12月記「元八まん」岩波文庫『荷風随筆集（上）』）。

或日わたくしは洲崎から木場を歩みつくして、十間川にかかった新しい橋をわたった。橋の欄（てすり）には豊砂橋と

⑥

してあった。橋向には広漠たる空地がひろがっていて、セメントのまだ生々しい一条の新開道路が、真直に走っていたが、行手には雲の影より外に目に入るものはない。



尾張屋板「本所深川絵図」（嘉永5年版・1852）（部分）　※くは撮影ポイント

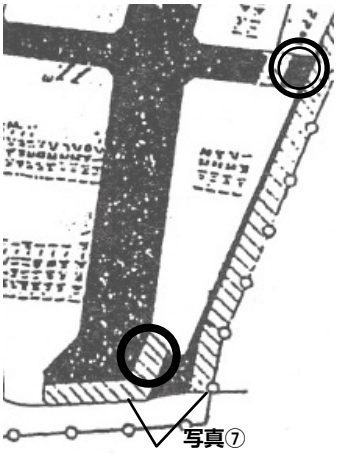
元〆川跡

写真⑦は、写真⑥の左手歩道を歩いて葛西橋通りに上った位置から東方向を見たものです。写真⑦左手の道は葛西橋通りです。このあたりを「本所深川絵図」で確認すると、十間川と接続する堀（元〆川）があったことがわかります。敬順は十間川沿いに歩いて、ここで右手に折れて元〆川沿いの道を行ったと推定されます。

⑦

震災後、元〆川は干潮時には底が見えてしまうほど水深が浅く舟運に不便とされ、また公共用地獲得のために境川・西横川とともに昭和5年頃までに埋め立てられています。

元〆川の跡をさぐるために左の『帝都復興区劃整理誌』第三編各説第四巻（東京市役所、昭和7年）所収の図（上が東）を見てみましょう。道のうち黒塗り部分は震災後に新造・拡幅される場所を示しています。また斜線部分はそれまであった道敷を再利用する部分です。一番太い黒塗りの道は葛西橋通りで、右側の斜線の道は写真⑦右手の道にあたります。また豊砂橋東たもとの斜線部分（丸印）に注目すると、元〆川は2本の斜線部分間の黒い部分であったことがわかります。図の上（二重丸印）にも同様な場所があります。よって写真⑦右手の道は元〆川南側に沿って通っていた道であることがわかります。



砂村新田の境界

写真⑦右手の道を歩いていくと、T字路にさしかかります（写真⑧）。このあたりは、かつて境川と元〆川を結んでいた西横川が元〆川と接続していた所で、元〆川には正直橋が架かっていました。

⑧

写真⑧左手には南砂六地蔵が祀られています（写真⑨）。六地蔵はいつの頃からか西横川を背に東向きに安置されていたそうです（昭和27年頃再建）。下の「深川総画図」（部分、万治元年・1658～天和2年・1682）を見ると、西横川と元〆川が合流する地点（丸印）が砂村新田の西側の境であることがわかります。境の神として辻に安置される六地蔵がこの地に守り伝えられていることは、このあたりがかつて境界であったことに関わりがあるかもしれません。

⑨

深川総画図（部分）

（次号へ続く）

（文化財主任専門員　栗原 修）

文化財まめ知識2

江東区内の狛犬

狛犬は神社の社殿の前や参道でみられる獅子形置物です。「高麗犬」・「胡麻犬」とも記されます。高麗（こま）という字から朝鮮半島を想起させますが、「狛」・「高麗」は「外来」・「異国」という意味でとらえられています。その起源はエジプト・ペルシャ・インドなどの神殿や門前に置く獅子形置物にさかのぼります。これが中国において唐風の獅子となり、さらに日本へ入って守護神的・邪を避ける狛犬となりました。現在残されている最古の狛犬は、平安時代の木造狛犬（奈良の薬師寺・広島の厳島神社　いずれも国の重要文化財）で、神社で目にするような石造の狛犬が登場するのは鎌倉時代以降です。他にも陶製や金属製の狛犬もあります。現在、江東区では十三件の石造狛犬が区有形文化財（彫刻）として登録されています。

①石造狛犬　江川場売手中奉納
一対　阿形

狛犬の形態

こうした狛犬の多くは一対のものです。一方が口を開き、一方が口を閉じる阿吽の形をとるものが多く見られます（①・②　富岡八幡宮）。

②石造狛犬　江川場売手中奉納
一対　吽形

また、吽形の頭部には角が作られているものがあります。③（点線部分・猿江神社）は、頭頂部が隆起しており、角と確認できます。また、④（点線部分・富岡八幡宮）には角の跡と考えられる窪みが見られます。

③石造狛犬　昭和6年在銘
一対　吽形

④石造狛犬　海辺大工町奉納
一対　吽形

⑤石造狛犬　一対　吽形

一方で⑤（点線部分・繁栄稲荷神社）のように阿吽の形態とは別に児獅子とたわむれているもの、前足の片方で毬をもてあそぶものがあります。このように狛犬は多様な形態をもっています。

狛犬の刻銘

登録文化財の狛犬には、本体を載せている基礎や基壇などにある刻銘により奉納された年、奉納者の名前などが確認できるものがあります。

⑥石造狛犬　海辺大工町奉納　一対　吽形台座

現在、区内でもっとも古い年代の狛犬は享保12年（一七二七）海辺大工町（現在の清澄・白河の小名木川沿い）が奉納したものです（⑥・富岡八幡宮）。また、寛政七年奉納の狛犬（香取神社宝物殿内）には、奉納者の一人として、本所相生町（現在の墨田区両国2～4丁目・緑町1丁目）の薪炭問屋で、落語や歌舞伎などに取り上げられた塩原太助の名前がみられます。

（文化財専門員　功刀俊宏）

情報コーナーで昔の生活道具などを展示

みなさん、2階の広報広聴課前（情報コーナー）にある展示ケースをご存じですか？昔の生活道具（民俗資料）や職人さんの作品、購入した歴史的な資料などを展示し、紹介しています。昔の生活道具を展示すると、多くの方から懐かしいという声が聞かれます。久しぶりに目にする道具と、自分が過ごした日々が重なるのでしょう。

子供の頃、そして大人になって使ったものも、いずれ昔のものになります。時間が過ぎれば、懐かしさが増すことも確かです。しかし、少し見方を変えると、それらは生活文化の遺産、歴史であることに気付きます。ただ懐かしむだけでなく、次世代につなげるため、まずは多くの方に見ていただきたいと思います。お楽しみに。

表　紙

昭和12年に川瀬巴水が描いた「永代橋」です。現在の永代橋は、関東大震災の復興事業第1号として大正15年12月に竣工しました。その橋の上を走る路面電車や車は、橋の下に描かれた江戸時代以来の和船や法被姿の人と対象的で、時代の移り変わりを写しています。